

出土資料を通じた中国文献の再評価

主催 科研「Multi Disciplinary Approachによる新出土資料の総合的研究」
(JSPS科研費 26284010助成)

基調報告 谷中信一教授 (日本女子大学)

学術報告

坊記礼説考 末永高康准教授 (広島大学大学院)

《出土戦國秦漢文献與〈孔子家語〉成書研究》

鄔可晶副研究員 (中国・復旦大学)

伝世文献から見た楚簡における「喪」と「亡」について
大西克也教授 (東京大学大学院)

近年出土戦國文献給古史傳説研究帶來的若干新知
與反思 郭永秉教授 (中国・復旦大学)

総合討論 司会 谷中信一教授

日時 2017年3月18日(土) 午後1時~午後5時30分

会場 日本女子大学新泉山館2階 国際交流センター一会議室1

- 使用言語 中国語 (日本語による通訳あり)
- 参加費 無料
- 討論会終了後に晚餐を兼ねた情報交換会を開催
参加費 一般 5,000円 学生 2,000円

【発表要旨】

坊記礼説考

末永高康准教授（広島大学大学院）

『礼記』坊記篇は、続く中庸篇、表記篇、緇衣篇とともに『子思子』の残篇とされている。郭店楚簡や楚竹書『緇衣』の出現により、坊記篇の成立年代もまた引き上げられて考えられるようになり、これが子思の手になるものであった可能性も論じられるようになってきている。この篇は「礼」を「民の坊（民が邪僻に陥らないための堤防）」と位置付け、礼に関する記述を数多く含んでいる。この篇が子思の頃に成るものであるならば、初期の礼学思想の状況を知る上で貴重な情報を与えてくれることになろう。だが、この篇が先秦礼学思想の展開との関係において論ぜられることはこれまでほとんどなかった。本発表では、先秦礼学の研究においてこの篇が持つ意味について初歩的な分析を加えてみたい。

《出土戦國秦漢文獻與〈孔子家語〉成書研究》

鄔可晶副研究員（中国・復旦大学）

今傳《孔子家語》一書の真偽問題、歴來聚訟紛紜。上世紀五十年代、尤其是七十年代以來、在戰國中晚期至西漢晚期的墓葬裏出土了大量的簡帛文獻，其中頗有與《家語》相關的內容，為我們重新討論《家語》的成書問題提供了前所未見的新材料。新出土戰國秦漢時代的文獻，既有整章整段與《家語》對應的，也有個別語句與《家語》相合的。這些能跟《家語》對上的新出土文獻的內容，幾乎都又見於《說苑》、《禮記》、《大戴禮記》、《荀子》、《韓詩外傳》等其他傳世古書。通過一些實例的討論，可以看出《家語》的相關文句和章節面貌往往顯示其“後代性”。對於新近公佈的北京大學藏西漢竹書《儒家說叢》第二章、西漢海昏侯墓所出竹簡和肩水金關漢簡中《齊論·知道》的殘文與《家語》及其他古書的關係，本文作了較為詳細的比較、分析。《家語》中那些無法在其他文獻裏找到相合內容的篇章或與其他文獻相合程度不高的現象，應如何解釋？新出土文獻的有關情況也能給我們帶來重要啓示。在與《家語》大量相合的新出土文獻中，八角廊漢簡《儒家者言》、阜陽一號木牘章題等批屬於集中出土的儒家文獻。本文還討論了這些出土儒家文獻與《家語》一書之間的關係。

伝世文獻から見た楚簡における「喪」と「亡」について

大西克也教授（東京大学大学院）

上博七『鄭子家喪』甲本1号簡に「𠄎」という字がある。「𠄎」と「亡」とを構成要素とする。整理者は「喪」と釈し、「喪事」を表すとしたが、現在では「鄭子家が死亡した」ことを表すと考えるのが有力となっている。しかし語彙としては「喪」にも「亡」にも「死亡」の意味があるため、本字が表すのは「喪」なのか「亡」なのかを決めるのは難しい。本報告では関連する楚簡中の関連字形を網羅的に調査し、本字は「喪」字の簡略化プロセスの上に位置付けられる一方で、「亡」が声符として独立した字形の中には、確実に「亡」（逃亡）を表したものがあること、伝世文獻において「喪」が「喪失」「死亡」等を意味するのは主に先秦時代に限られること等を手掛かりとして、楚簡における当該字が語彙としては「喪」を表した可能性が強いこと、先秦の「喪」が秦漢時代のテキストにおいて「亡」へと変容するプロセスや、出土文字研究に対する伝世文獻の有効性等を論じる。

近年出土戦國文獻給古史傳説研究帶來的若干新知與反思

郭永秉教授（中国・復旦大学）

近年來楚地戰國文獻的大量出土和發表，為古史傳説研究提供了不可多得的新資料新信息，啟示我們對過去的一些判斷重新進行思考。本文的目的，是以問題為綱，把近年出土戰國文獻中有關古史傳説的新資料及其引致的新思考加以簡要綜述，必要時還將對一些相關的討論加以評述。全文分為：一、顧頡剛先生及“古史辨”派古史傳説研究的主要結論簡介；二、“默證”的使用限度及方法問題；三、“黃帝”傳説演化問題的新資料；四、禹的神性問題及其與夏代的關係；五、虞代問題與堯舜的歷史性；六、其他，共六個部分，盡量結合新出材料和最近關於古史傳説的討論展開，力求以平實的態度看待新出土戰國文獻對古史傳説帶來的新知，也因出土文獻提供的某些信息的啟示而對過去古史傳説研究中（特別是“古史辨”派學者的相關研究）的一些問題進行必要的反思。